戦旗

第十五号
一九六〇年五月廿一日発行
発行所
東京都文京区元町一の七
世界労仂運動研究所
編集 発行人　鍋木潔
一部　拾円

万国の労仂者団結せよ！
革命的前衛・共産主義者同盟を
すべての工場に組織せよ！
共産主義者同盟

「戦旗」固定購読
お申し込みは
東京都文京区元町一丁目七
世界労仂運動研究所内
戦旗経営局
定価　一部　十円
月　三〇円　半年　一八〇円

岸を打倒せよ!!

連日スト・抗議デモで新安保をぶっつぶせ！
岸・自民党の暴挙に力で反撃せよ！

岸・自民党は五百の警官隊を院内に導入して本会議を開き、会期延長をわずか五分、新安保批准を七分で単独採決した。

支配者階級は、反対闘争の激化を目前にして、自らの階級支配の具である議会民主々義を公然とふみやぶつて暴力装置を動員して強行した。だがその瞬間から政治情勢は一層の緊張に突入した。労仂者・人民の怒りは爆発しようとしている。廿日の国会デモは、国民会議の枠をのりこえて、かつてなく激しく闘われ、首相官邸、小沢安保委委員長邸は憤怒に満ちた労仂者・学生によつてうちこわされようとした。

「岸を打倒せよ！」の声は刻々と擴がり強まつている。労仂者・人民の怒りにおされ、社会・民社党は強硬な態度をとり、総評も連日の行動を提起し、自民党内の動揺も進んでいる。

一瞬も止まることなく反撃せよ！

連日のスト・国会デモ・首相官邸デモで国会をマヒさせせよ！

会期延長・新安保批准をふきとばせ！

日本の李・岸を打倒せよ！

瞬時もおかず反撃を！
「冷却期間」つくらすな

暴挙の限りをつくした岸・自民党は、労仂者階級から中間諸層に至るまでの圧倒的批判の波の中で、「事態を静観」し、「冷却期間」をおいて興奮のさめるのを待とうとしている。

だが、岸の思惑を裏切つて政治情勢は十九日夜から激しい動揺に突入した。国会は完全に空白状態におちいり、あらゆる政治勢力が「岸退陣」をかかげて動き出し、この勢にのり自民党内反岸派も〃三選阻止〃のため結束しつつある。労仂者人民の大衆闘争の一撃は、安保もろとも岸をふきとばすだろう。

労仂者・人民のうちに充満した怒りを、ただちに行動に組織せよ！ 瞬時もおかず、力を倍して反撃に転ぜよ！ 日々拡大する連日の国会デモの波で、国会をマヒさせよ！ 怒りのデモを首相官邸自民党にたたきつけよ!! ゼネストで止めをさせ!! 抗議闘争の圧倒的爆発によつて混乱に陥つたブルジョア秩序の中で、岸が辞職するか、国会を解散するかの二者択一に追い込め!! 卅日以内に国会が解散するならば、新安保は日の目を見ることなくその他の反動法案とともにけしとぶ。

岸の辞職は、後がまが決まらぬ自民党政権の重大な動揺をもたらさずにはいないだろう。

冷却期間をおかせるな!! 即時連日の闘争で反撃へ!!

【総評】廿日午後、単産委員長書記長会議を開いた総評は、闘争の目標を国会解散においた方針を出した。すなわち①五・二六に時限スト・時間内職場大会三十分(五・二〇を上回るものとする)各地で抗議眞相報告集会。②批准無効・解散要求二千万署名。③廿日以降連日の国会への抗議請願行動。これは、自民に強行を許したママゴト遊びの指導を正当化し、廿六日を最後として闘争をうちきろうという方針である。廿一日から廿六日までの一週間の空白は廿日にピークに達した闘争に致命的打撃を与えるものだ。廿日から連日の「国会抗議」も相もかわらぬお焼香では、闘争に水をかけるだけだ。

廿六日をまたず、連日戦闘的デモで国会を包囲せよ!! 岸・自民党に抗議デモをかけろ!!

五・二六を廿四時間ゼネストとせよ!! そのために今日から準備せよ!!

総評・国民会議の枠を破り五・二六ゼネスト大抗議デモで国会をマヒさせ、岸を打倒せよ!!

首相邸へ連日デモ
全学連廿三日から連続　廿四日文化人

廿日、抗議闘争の先頭にたつた全学連は、廿一日の首相公邸にたいするデモにひきつづき、廿三日、再び午後から授業を放棄して首相官邸に大デモをかけることを決定、同時に五・二六にむかつて連日の波状デモをかける。社党は廿一日の中執で、共産党の安保体制打破論を批判、首都における闘いと同時に全国各地の自民党支部、国会議員などに波状的な抗議闘争を起すことを決定。さらに安保批判の会に結集した文化人は廿四日、抗議デモを決定。連日の抗議闘争を最大限に闘うことにより五・二六にゼネストを背景に、国会、首相官・公邸に大デモをかけ、全政治情勢を一変することこそ闘いの鍵である。

怒りのデモに包囲　廿一日終日首相邸

闘いは、休みなく続いている。廿一日にも再び首相官邸の門は破られた。まず地方代表約一万が正午すぎ官邸におし寄せ、次いでおしよせた社会党のデモ隊がヘイとサクをのりこえて官邸内に突入、激しい抗議デモを幽開、さらに渋谷南平台の首相公邸は朝から晩まで、社会党議員団、地方代表、労仂者、学生のデモ隊に包囲された。抗議デモの激しいうずの中で岸は裏門からこつそりとしか首相官邸に出入りすることはできなかつた。闘いの昂揚とともに政治情勢は急ピッチに動いている。岸は明らかにうろたえている。満身の笑顔はどこかにすつとんでしまつた。岸を打倒するのはいまだ。

批准強行に怒り爆発
三万の学生労働者首相官邸へ

五月二十日、国民会議の請願デモは、五・一四の域を一歩も出ず、川島幹事長をして「あんな請願なら痛くもかゆくもない」と語らせたようなカンパニアに終る見通しだつた。しかし、この日、大多数の労組員は、〃平穏なる請願〃のワクを踏み越え、数千の労仂者が、革命的な全学連の正門前大抗議集会、首相官邸デモに合流した。

全学連は、この日、正門前に二万、千駄ケ谷体育館前に行つた八千を合せると三万近くにのぼる学生を国会デモに結集し、首都において戦後最大のデモンストレーションを敢行した。国会前でブ厚い板をうちつけたトラックのバリケードに阻まれて遂に国会への怒りを爆発しえなかつた二万の学生は、指導部をつきあげつきあげ、首相官邸と自民党本部に向つた。ウツ積した憤激は、首相官邸前で爆発し、警官の壁を破つて、またたく間に三百が鉄門から突入した。虚をつかれた警官が警棒を抜いてなぐりかかる。三池さながらの激闘が半時間にわたつて続いた。八名が逮捕された。

「岸を〃日本の李〃にせよ！」の叫びが現実の大衆行動になつて押しよせるのを見て岸はぞつとしたに違いない。

ここ一週間、こうした戦いをくり返し、擴大せよ！

一方、「国民会議の旗の下に」という美しい言葉にひかれて千駄ケ谷に集合した八千名の別動部隊も、議面前で激しいジグザグを行い、衆議員通用門前の警官隊の壁とぶつかるなど、巻大なエネルギーを蔵していたが、国民会議のワクを一歩も踏みはずすまいとする代々木系指導部のために、警官一人現れない長いコースをねり歩くだけの行動に終つてしまつた。

千駄ケ谷から国会まで歩き、署名用紙を配られ、議面前をかすめて国労会館にたどりついた時には、参加者は四分の一以下になり、淋しい解散集会に終つた。代々木派の自治委員は大声をはりあげて、学連中執ぼうの総括演説を次々に行つたが、多くの学生は果して、安保批准が卑劣な手段で強行された当日、国会をかすめ延々練り歩くだけのデモに満足しただろうか。

全学連デモに労仂者続々合流

五・二〇の全学連デモに全都の革命的労仂者は続々と合流、雨ガツパに身を固めた全逓の羽田支部や大崎支部を中心とする城南ブロックの労仂者、全国一般や電通、国公などを始め、一千を越す労仂者が全学連とともに激しいジグザグを展開。それは、五・二〇を前にして東部青婦協が総評の請願デモを否決、また全逓城南ブロックでは国会デモ坐りこみを決議、新宿青学共闘や港共闘も強力な国会デモを行うことを決議しておりそれが五・二〇の巨大なうねりとなつたのだ。左翼的再編の力強い動きは安保闘争のなかですべての圧力をはねのけてすでに開始されている。

無力な抵抗に終始
十九日夜の国民会議

岸・自民党の会期延長・安保批准の強行は、きわめて周到に仕組まれた悪辣きわまるものだつた。

岸は廿日以降、反対闘争は日々激化するとみてとり、十九日に一気に正面突破をはかつたのである。

彼らは、松葉会三百名をはじめ、六百に及ぶ暴力団を自民党秘書団の名で院内に入れ、本会議場の入口を占拠し、警官隊も構内に配置していたのだ。

この夜国会は、一万の労仂者、学生のデモでとり囲まれ、抑えに抑えられてきた大衆のエネルギーは、奔流となつてあふれ出ようとしていた。

雨中議面前路上でデモつていた労仂者は、七時すぎから国会の周囲を文字通り包囲デモに移つてその力を示した。

だが、警官隊が院内に導入され、社会党議員のゴボウぬきがはじまつた、との報せが伝つた時、第一議員会館前に待機していた労仂者は、シュプレヒコールでの抗議でお茶をにごさせられたのだ。

この時こそ、警官の手で通されようとしている会期延長と批准を、労仂者の実力で阻止するため、警官のかべをものともせず、国会に入るべきだつたのである。

のみならず決定的瞬間をこうして無為に過させた国民会議は、大衆の力の爆発をおそれて、院内での危機の刻々の進行をひたかくしにし、「まだ大丈夫」と抑えつづけた。会期延長は十一時五七分に、批准は十二時七分に通つていたにもかかわらず、腕をこまねいて待機する一万の労仂者・学生が、自民党の暴挙を宣伝カーから聞かされたのは、十二時半も過ぎてからだつた。

挨拶に立つた社会党鈴木元委員長は「闘いはこれからだ」といい、共産党野坂は「安保体制打破の闘いをねばり強く続けよう」とのみ語つて、鋭い野次に迎えられたのである。

戦後最大の戦い　全学連
全国で三十五万決起

全学連の強力な指導のもとに、五月二〇日、学生運動は未曽有の昂揚を示し、全国で三十五万の学生がストライキ・授業放棄で街頭に進出し、新安保の暴力的批准粉砕、岸内閣打倒、首都学生の革命的国会デモ支持を全国の労仂者、人民にアピールした。

京都大では、学校側の弾圧をはねのけレッドパージ闘争以来の全学学生大会でストライキを決議し、全学の講議を空にして、同志社、立命の学生とともに三千名の大デモンストレーションを行つた。福岡では、九大教養部の学生を中心に三千名が決起し、労仂者とともに強烈なデモを展開した。北海道は文字通りの全道ストライキで、今回は、大衆の圧力で遂に代々木系の北大教養委員長も右翼分裂の余地がなかつた。

東京近辺では、埼玉大、千葉大、群馬大、静岡大等からはストライキで大挙学生が上京し終始学連の国会デモの先頭に立つた。

そのほかに、金沢、愛知、三重、広大等においても、全学を空にしての街頭デモ自民党支部への大衆抗議で支配階級を恐怖のどん底におとしいれた。

代々木派惨敗
東大教養、常任委員選挙

この闘争において、日本共産党中央に直結する代々木系学生は、廿四中委における厳重警告にも拘らず、一貫して右翼分裂の策動を続けた。しかし、彼等の偽善的な闘争破壊は直剣な学生大衆の憤激を買い、全国各地で大衆自身の手でばけの皮がはがされている。東大教養学部においても、代々木系自治会常任委員は全精力を全学連指導部誹ぼうに集中し、大衆闘争を一貫して放棄してきたが、五・二〇の安保最終段階の闘いを控えた五月十七日の選挙で遂に常任委員会から一人残らず追放された。

主張
即時反撃にうつれ！　岸を「日本の李」とせよ！

（一）

岸内閣は危機におちいつている。五〇日間の会期延長と新安保の衆院通過を警官隊を乱入させて強行突破をはかることにより「永年の宿願」は一挙に達成されたかにみえた。その瞬間、岸は満面に勝利の笑顔をただよわせてたに違いない。

だが、強行採決の瞬間から、政治情勢は急ピッチに激動しはじめている。すべての政治勢力と政治潮流が自己の要求をひつさげて舞臺の上に登場してきている。自民党主流派は第二の攻撃を準備するために、冷却期間をおき始め、反主流派は岸の三選阻止、岸退陣の要求を露骨に推進し始めた、社会党は二〇日以降の国会審議を全面的にボイコツト、国会解散・総選挙の要求をもつて総辞職論を打出し始めた。民社党もまた審議を拒否した。二〇日以降、国会内は全く空白状態をもたらし政治情勢はゆれ動いている。

強行採決に憤激した労仂者階級と学生は、抗議闘争に立上つているエネルギーを冷却させずに燃えたたせるならば、流動局面が拡大し、決定的な政府危機が訪れることは必至である。

五八年、十一・五警職法闘争の時にも、五・二〇直後と極めて類似した情況をもたらした。十一月四日、国会会期延長を強行し、十一・五闘争はその怒りの爆発点となつた、階級関係はゆれ動き、政府危機が生じ国会審議はストツプした。岸を打倒すべき絶好の条件が生れていた。今日、また再び同じような情勢が生れている。右翼暴力団と警官隊の護衛によつてのみしか強行採決をなしえなかつたことは、逆に岸内閣を危機に追こんだ。憤激の嵐は首都東京を中心に、全国の隅々にまきおこつている。いまや岸内閣打倒は行動の明確なスローガンである。ゼネストを背景に、昂揚しているエネルギーを連日国会にぶつけるならば岸打倒は必至である。

強行採決によつてすべてが終つたと考えるような敗北主義をすて、直ちに進撃を開始しなければならない。警職法闘争の際には、社会党、総評などの妥協と日和見主義によつて、エネルギーは冷却させられ、きり開かれた激動局面を追撃に転ずることができなかつた。警職法闘争の苦々しい教訓を再び繰返してはならない。強行採決にたいする抗議ストと抗議デモから岸打倒にむかつての反撃に直ちに転じなければならない。

（二）

焼香デモや請願を何回くり返えしても批准が阻止しえなかつたことは、十九日の情況がなによりも明白に立証している。五月十四日、自民党の川島幹事長は「請願書を何枚もつてきてもたいしたことはない」とうそぶいていたが、彼らは全学連を中心とした戦闘的部隊がおしよせてくる前に、暴力団と警官隊の導入をはかる強行突破の作戦を着々と準備していたのだ。しかも十九日、緊急事態が発生し、急をきいて続々とつめかけてくる労仂者を前に、総評、社、共、国民会議はまた再び、見事な裏切を公然どやつてのけた。本会議開会のベルが夜空に鳴りひびいている時にも、三万の労仂者をぐるぐると国会周囲を歩かせることだけで事足れりとしたのだつた。一年有半にわたつて安保闘争を裏切り続けてきた彼らの集大成が十九日の深夜に実を結んだのであつた。

だが労仂者階級をいつまでも愚ろうすることはできない。彼らの指導は至るところで破綻を見せている。五・二〇を最大の抗議闘争として組織すべき時に、彼らは相かわらず衆院議面受付前で請願を繰返させようとしたが、激昂した労仂者はきめられた枠を明らかに破つていた。全学連のデモに合流した全逓や全国一般、国公の労仂者の闘いは勿論、国会前のいたる処で繰返されていたジグザグデモ、安保特別委員長小沢の所におしかけた東交労仂者の闘いはそのことを明白に立証している。廿一日にも首相公邸と国会にデモ隊がおしかけた。闘うエネルギーは次第に爆発しようとしている。五・二六を頂点とする波状的なストとデモをもつてブルジョアジーを脅かし物情騒然たる情況をかもしだすならば、政府危機は擴大し岸は倒れ革命的情勢をつくりだすことができるだろう。そのためには、既成の枠を今こそ完全につき破つて進まねばならない。国民会議は廿六日に再び、五・二〇と同じ規模の行動を起すといつているが廿六日までまつ必要はない。反撃は即刻開始されねばならない。しかも国民会議や総評がいうように批准阻止から国会解散に請願をすりかえて、四・二六、五・一四、五・二〇と同じ形態の闘争を組織することによつては、強行採決を阻止しえなかつたと同様に、全体として受身にたたされている闘いを反撃に転じさせ、岸を打倒することは絶対にできない。

いかに闘うか、いまや全く明瞭である。

労仂者諸君、学生諸君!!

ゼネストで連日、国会を大包囲せよ!!

岸を打倒せよ!!

一切の妥協を排撃し政府危機を徹底的に擴大せよ!!

一切の冷却期間をおくな!!

五・二六を勝利への展望をきり開く転機とせよ!!

赤色宣伝の一大基地を建設し迫りくる階級決戦を迎えよ！
印刷所拡大カンパを　〃戦旗〃日刊化をかちとれ！

共産主義者同盟政治局・書記局

われわれは、諸君にわが労仂者印刷所の飛躍的拡大のため資金カンパを訴える。

わが同盟は、昨年の同盟三回大会の決定に基いた、労仂者印刷所設立のための同盟員一人一千円カンパを遂行して印刷所を設立し、〃戦旗〃を発行した。

戦旗は、わが同盟が、小さな一コの思想団体から脱皮して、暴風雷鳴をよびおこす一政治勢力として発展するのろしとなつた。戦旗は革命的労仂者に向つてイナヅマのような指令を発し、豚のように肥えふとつた政府、資本家どもの企らみを骨までハダカにし、闘う気もないくせに指導者ズラをして労仂者を革命的闘争からひき離そうとしている総評民同や日共の悪賢こさをあばきだした。

系統性と全面性をそなえたこの革命の自仂機械、レーニンが幾度も重要性を強調した全国的政治新聞の役割を、いさゝかでも軽視することは断じてあやまりである。渇するものが水を求めるように革命的労仂者がむさぼり読み、改良主義者が天雷のように恐れる戦旗を全同盟員は一丸となつて、いつそう鋭く、いつそう圧倒的な武器に鍛えあげねばならない。

同盟の戦旗発刊に恐れをなした日共等の改良主義者どもは、「三号ぐらいでつぶれるさ」と自ら慰めていた。それどころか戦旗は断乎として半年のあいだ定期刊行を守り、さらに号外を発刊して急速に労仂者階級のなかに浸透拡大していつた。それは、全国の同盟員・読者の奮闘とそれによつて維持された次のことによるものであつた。すなわち、労仂者印刷所の存在と印刷所労仂者の超人的活動とである。

そして今や、わが同盟が、戦旗を日刊・十万部をこえる一大政治新聞をめざして強化せねばならないとするならば、第一に労仂者印刷所の飛躍的強化拡大が必要である。

『だが、なぜまたこの安保決戦のさなかに？』というのか!!

それは、今こそ安保決戦のさなかであり、そしてここを起点として、日本の階級闘争は、わが同盟を先頭にして全く新しい段階に突入するであろうし、そうしなければならないからだ。わが同盟が改良主義者にうちかち、ブルジョアジーに勝利するか否かは、西尾一派の金をまきちらすようなブルジョア的宣伝に対してもつぱらその物質的力量にかかつている。わが同盟は全国無数の革命的労仂者の零細微小なカンパによつて強化拡大された労仂者印刷所からの戦旗とその号外、ビラ、パンフの洪水によつて答えねばならぬ。彼らが革命的闘争を翌日に十万のビラで中傷するならば、われわれはその前夜に百万のビラで眞実を訴えねばならぬのだ。階級闘争の新たな展開を迎えて、戦旗を旬刊から週刊へ、週刊から週二回刊へ、そして日刊へと発展させ、昼夜をわかたぬ大小色とりどりのビラの発行、そして労仂者の革命大衆団体のあらゆる出版物をことごとく怒濤のように吐きだしていく大印刷工場の建設にただちに着手せねばならぬ。

日本と全世界の革命的激動の時期、数千万の肉体の相会する階級決戦の時は刻々と迫つている。そして、いまわれ〳〵が死力を注いで闘いつつある安保、岸打倒の闘争に、わが同盟の全力量が発揮されてこそ、その展望は意外に直ちにひらけるであろう。この闘争のさなかにおいてこそ、わが同盟は数千万を組織する武器を獲得しなければならないのだ。

全国の同盟員諸君！
全国の革命的労仂者諸君！

労働者印刷所の拡大資金カンパに直ちに応ぜよ！ タバコ銭、フロ銭を節して印刷所拡大資金に投ぜよ！ 周囲のすべての労仂者に訴え、乏しい給料とボーナスから豊かな革命の武器を生みだせ！ 親子、兄弟、親類、知人、先輩、後輩、学友、旧友に対する革命的友情によつて大口、小口のカンパを組織せよ！

ブルジョアの金は労仂者の生みだしたものだ。ブルジョアからでも遠慮なく頂戴しろ！ 額は多いほどよい！ 貧者の一灯を最も重視せよ！

だがそれと同時に、階級闘争は冷酷な物質的力量で決定されることを忘れるな！ どんなところからでも技術の限りをつくして最大多量の金を最も早くつくりだせ！

いかに金を作るかを自己目的化せよ！ どうやつて金を作るかを必死になつて考えよ！ そして骨身を惜しまず空想的でなく、現実的な方法で実際に金を作れ！ つくりだした金は、額の大小を問わず、直ちに戦旗経営局に集中せよ！ 六月末日までに断固として目標を遂行せよ！

一九六〇年五月一五日

資金カンパ要綱

カンパ目標額・二百万円

カンパの対象・同盟の内外を問わず。

カンパ目標額達成の期限・六月一日から六月三十日までの間。カンパには直ちにとりかかる。

資金の主な用途・印刷所の擴大移転、印刷機・活字鋳造機の購入、運転資金若干。（現在の印刷所は、印刷所労仂者の献身的活動により赤字を克服し独算制の基礎を固めつつある。したがつて投下された資金はただちに印刷所規模の擴大に利用される）。

カンパ送り先・戦旗経営局　東京都文京区元町一の七世界労研内

なお、カンパ以外に借入金も歓迎するが、返済は各地方組織の責任において行うこととする。特殊なものについては個別に検討する。

戦旗週刊化を実現せよ！

戦旗編集局

階級闘争は十日を待ちしはない。わが〃戦旗〃が眞に敵階級との戦闘の武器となるには、旬刊では決定的に不充分であることを、六ケ月の経験が痛烈に証明した。われわれは、一日も早く日刊化を実現する重大な決意を固めた。全国の同志諸君！ そのために〃戦旗〃編集部は、四頁—週刊のプランを全面的に変更し、旬刊—週刊—週二回刊をまず達成しその中で四頁化を同時に実現する方針を決定した。闘いの切迫はわれわれを駆りたてる。〃戦旗〃週刊化を六月五日号をもつて開始する。週二回刊を一九六一年一月一日をもつて遂行し、明年中に日刊化を実現するであろう。同志諸君の協力を熱望する。

赤雷

★ミコヤンが失却したという。大いにありそうなことである。スターリンは廿年代の党内闘争や、一九三〇年代のヒツトラー、チャーチルとの取り引きの中で、何度か百八十度の方針転換をやつてのけたが、その度にそれまで自分の政策に熱烈な忠誠を捧げた者を容赦なく切つてすてた。今度のフルシチヨフのやり口はそれとそつくりだ。ブルジョアジャーナリズムが「スターリン時代に戻つた」というのもこの面からいつても当らぬといえども遠からずだ。

★最高会議での反英グループ事件以来の大々的人事異動も、一般にいわれているように「単なる若返り」とみることはできない。キリチエンコに代るコズロフ・ブルシネフの登用は、政策の転換に伴う指導体制の整備であることを示している。

★パワーズは逆スパイだつた、という話まである。眞偽のほどは不明だが、とにかく芝居はうまくできていた。いずれにしろ、フルシチヨフの「転身」か「U2機事件」によつて突発的にもたらされたものではあるまい。ズブズブの日和見政策から一転してセクト主義的冒険主義に転じることはスターリン主義の常軌であることを再度銘記すべきである。

新左翼結集のために

右翼化の意図砕け

日教組第二二回定期大会の課題

五月七日、日教組代表者会議は二十四日からに予定されていた第二十二回定期大会を安保闘争のヤマ場を見越して五日間延期した。安保闘争のヤマ場を見越して、といつても決して日教組がこの間力一杯の闘争を打とうというのではない。逆に実力行使を含まぬ集会でお茶をにごし、「会期延長を強行してきた場合に」六月中旬にILO批准にともなう弾圧立法や夏季手当とからませて組織の総力をあげた実力行使を中核に強力な闘いを組むというのである。

この左翼的ベールに見出される覆い切れぬ程のズブズブの日和見主義、決戦の忌避こそ、いみじくも延期された二十二大会の問題点の本質である。

「日教組の右翼化」は急速に、しかも深刻に進行している。

しかし「右翼化」は決して平タンな道を自然に進んできたのではない。それはいくたびか勝利の契機、回復の契機をあるときは無方針から逸しある時は意識的に押しつぶしてきた結果としての右翼化なのである。

この点を明らかにするためには少くとも昨年の高知大会を振りかえつてみる必要がある。二月の臨時大会で遂に評価する岩手修正案を一票差で可決してしまつた後の高知大会では当然左派の主導権は教育労仂者の未曾有の闘争を無に帰させてしまう思想と明確に対決し、再び闘う方針を確立する方向にむけられなければならなかつた。にもかかわらず共産党を中心とする左翼のこの大会に対する基本方針は、「派閥の解消」であつた。左翼の側からする「派閥の解消」とは、具体的には、戦術左翼として一定の限界をもちながらも勤評闘争の原動力となつていた平垣派を解消することであり、闘う方針の放棄を意味していた。しかし平垣派の崩壊は決して下部に闘う力がなくなつたことを意味しているのではなかつた。激しい闘争を通じて育つた下部の活動家は臨時大会の折りにも徹底的に神奈川勤評に反対して、勤評絶対反対の上の山大会の旗を押しすめようとしたのである。そして高知大会の時でも一方で高知、群馬と組織をかけた激しい権力との対決が行われていたのだ。高知大会に現われた左翼の崩壊という状況は徹底的に闘い過ぎてもうこれ以上闘えないから起つたものではなく、逆に闘いの現場に未だ莫大なエネルギーを内包したまま、「前衛」の意図的な方針によつて左派は崩壊させられたのであつた。それは高知大会直後から始まり九月八日を頂点とする勤評身上書提出拒否の闘争にはつきり示されていた。勿論、内に実力行使回避を蔵した地教委団交という方針が闘争を本質からずらす結果を惹き起した事例(例えば交渉それ自体が自己目的化された)がかなり多くみられたが、福岡や東京は、徹宵交渉を通じて激しく権力と対決し、権力の本質を大衆的に暴露して更に闘いを発展させる芽をつかんだ闘争の存在は明らかに闘う幹部の存在する所、教育労仂者のエネルギーが無限に発露される事を示していた。しかし、同時に九月闘争ではつきりしていたことは、上部指導の徹底的な欠如だつた。対地教委交渉という闘争形態のもつ必然的ともいえる欠陥がそのために極端なまでに暴露されたのである。闘争の凸凹は当り前であつた。しかし、問題は闘える所が徹底的に闘うと共に指導部こそが、その闘争を徹底的に横に拡大し、しかも、その闘争を更に発展させる方針を早急に出すことが必要だつたのである。九・一五、九・三〇という身上書提出の決定的時点で何ら統一行動を起し得ぬままに、九・八で発揮された下部のエネルギーは再び冷却させられた。「評定書不提出」及び「勤評撤回」を第一義的な目標として闘われる闘争の不徹底さは当然の帰結として「勤評体制打破」という思想を前面に押しだした。東京、北海道等で教育課程ブロック講習会拒否の流血の闘争がくまれている反面、共産党はアカハタで教育課程闘争でピケは問題がある、とかき、日教組講師団は内容で闘え、とお説教をたれた。十一月の第四九回中央委員会では「弾力性のある闘い」「多角的実質闘争」ということが強調された。そして教育労仂者の闘いは「教育者」の特殊性にのみとじこめられていつた。曰く「民主教育確立」「教育予算増額」云々。

ブルジョアジャーナリズムから一斉に「右翼化」と喧伝された一月の全国代表者会議、二月の五十回中央委員会は高知大会以後の路線の当然の帰結でさえあつた。勤評闘争の中央交渉への委譲は福岡の二月闘争を押しつぶす役割を果し、教育課程闘争における実力ピケ否定の確認は東京の闘争の芽をつみとり、北海道教組の裏切りを助けた。一つ一つの契機をつかんで何とか大衆闘争を展開して行こうという先駆的幹部や、そこに結集する先進　下部教育労仂者の闘いは統一と団結論によつて抑えつけられた。そしてこの延長上に開かれる今度の岩手大会は明らかに、五十中委路線の、従つて上の山大会決定の実質的変更の大衆的確認の大会として位置づけられるに違いない。しかも「転向は平和的に行なわれる」。「勤評はとられたが敗けたのではないということが闘いに参加した組合員に実感としてうけとめられていつた」という大嘘にくるまれてこの転向が行なわれようとしている。

国労が藤林アッセン案に屈服して、右翼化の先鞭をつけたが、国労の次に日教組の右旋回はすでに始まつている。三池の断固とした独自闘争の体制に支えられて炭労大会が藤林アッセン案受諾の裏切りを許さなかつたことと対照的に、日教組大会は七月に開かれる総評大会を象徴するものになるに違いない。とはいえ、それでは日教組は二度と立ち上ることは不可能だろうか、勤評闘争を闘つた教育労仂者のエネルギーは再びは爆発しないのだろうか、と考えるなら、また問題は違つてくるだろう。

既に簡単にみたように、高知大会における「左翼の崩壊」以来いくたびか独自の闘争を徹底的に闘う部分は、明らかに存在している。五月九・十と開かれた都教組定期大会においても、共産党を中心にした旧来の左翼の転落と全く対照的に、新たな左翼が台頭してきている。

新たな左翼、まず彼等は、大衆闘争をもつて権力にきびしく対決して行く志向をすつかり捨てて教育労仂者の闘争をすべて教育運動にむける思想と、徹底的に闘わねばならない。展望は決して議案の示している様な下部の組織づくりを自己目的化する所からは出てこない。全体の労仂者階級の課題を、政治闘争の課題を大胆に提起して独自にでも闘う中で「闘う組織」をつくつて行くことが必要なのだ。「体制打破」という体裁のいいゴマカシを排除して、個々の闘争をそのものとして徹底的に闘わなければならない。左翼は安保闘争の成果をもつて大会に臨み、指導部の裏切りときびしく対決しなければならない。そして夏から秋にかけての反動攻勢に対して部分的にであれ、大衆的に闘い、それを徹底的に擴大し、強力な左翼を全国的に結集してゆくこと、これのみが日教組の「闘う組合」としての再生を保証する。

経済分析

資本主義と農業問題

農業問題の「曲り角」【1】

農業問題などというと、何をいまさらという人があるかもしれない。たしかに農地改革が完成して以後、農業問題は一般の人々にとつては関心事ではなくなつたといつてよいだろう。だが、前衛党にとつてそれはつねに注意しておかなければならない問題だ。それに、ブルジョアジーの側でのこの問題にたいする政策に大きな転換がおこなわれようとしている現在では、その方向をさだめることは労仂者階級の事業に大きな意味を持つている。

労仂者階級の前衛であるわれわれはまず、労仂者階級の動向に十分注意しさえすればよいという人がいるかもしれない。だが、これは不充分だ。いままでの階級闘争の歴史をみればわかるように、労仂者階級が勝利できたのは(ロシア、中国)農民を自分の側にひきつけえたときであり、農民を離反させたときにはドイツの例にみられるように、いつも敗北を喫している。どこの国でも農民は人口の中の大きな割合を占めている。農民を自分の側に引つけられたかつたら、労仂者階級は勝利することは困難なのだ。いやしくも革命について、かたるならば、われわれは他の階級、階層のうごきを十分に把握していなければならない。労仂者階級の前衛が農業農民問題につねに注意を怠つてはならない、というのはこういう意味だ。(こういうとすぐに、じや農民運動を組織しろという人がいる。だが、そういうことではない。農民を労仂者階級の側に結集するということは、労動運動の指導者と、農民団体の指導者とが、握手することでも、労動運動と農民運動が歩調をそろえて行動しようということでもない。いままでのマルクス主義陣営ではこういう考え方が支配的だつた。農民と同盟するためには社会主義という目標を打出すべきでないというスターリン主義者の戦略のたて方がそうだ。これは、統一戦線や同盟ということの無理解から出てくるあやまりだ。統一戦線の原則は「別々に進んで同時に打て」である。指導者達が握手するかどうかに関係なく――握手するにこしたことはないが――同じ目標に向つてそれぞれが行動を起すというのが眞の統一戦線だ。農民を結集するというのは、とくに決定的な時期に農民に労仂者階級の行動を支持させあるいは好意的中立をたもたせるということである。そのときどうしたらよいかは、まだわからないが、ともかく現在農民運動を組織せよということではないのである)

また農業問題の現状をどうとらえるかは、情勢全体の把握と密接なつながりがある。たとへば、最近農林省や経済同友会などで発表した新らしい農業政策では、日本農業の将来をかなりバラ色にえがいている。これを額面どおりうけとれば、日本資本主義万々歳であるが、はたしてそうだろうか。これは、われわれの戦略・戦術とすぐつながつてくる重要な問題である。

この農業問題は、他のあらゆる社会問題と同じように、そのものとしては資本主義の帝国主義段階になつてはじめて発生した。それ以前、つまり自由主義段階では、資本主義の世界市場は、イギリスを世界の工場とし、他の各国はイギリスに原料、食料を提供して工業製品を買うというかたちになつていたことはこの前にのべた。イギリスでの農業は、封建的土地所有がくずれさつたあとに成立した自由な自営農民が分解してゆき、とくに産業革命とならんで農村におそつた農業革命が進むにつれて決定的に土地を失いプロレタリアとなつて、資本制的農業を成立させていた。つまり、農業資本家が地主から土地を借り、自分で農具、肥料を買い入れ、労仂者を雇い入れて経営し、地主に地代だけ支払うという関係である。まだ小農民が残つていたとしてもそれはイギリス資本主義の発展につれて、分解してゆく傾向にあつたし、なにより先のような、国際的な「分業」関係をつうじてイギリス資本主義の比重を縮少させながら、スムーズに発展していつたから、ここでは農業問題はそのものとしてはみられはしなかつたわけである。

帝国主義段階になると話はべつだ。このようなかたちで資本主義が発展する中でイギリスだけでなく、ドイツ、アメリカ、フランス、少しおくれて日本、ロシアなどが資本主義国として世界市場にあらわれてくる。以前は農業国であつたこれらの国が工業国となつたのだから、自由主義段階でのような国際的「分業」はもうみられなくなる。またおくれて発展し、またイギリスの棉工業でなく鉄鋼、化学などのような重工業に基礎をおいて展開されてきた。これらの諸国ではイギリスのような個人企業ではなく株式会社という企業形態が支配的だつた。こうなると、設備の更新がいつでも行われるから、合理化がたえず行われ、相対的過剰人口がたえず作りだされ、慢性的に存在するようになる。これが農村に滞溜して農民の分化をおしとどめるから、これらの国(アメリカは別として)ではいずれも資本主義的農業ではなくて小農経営が、みじめな状態で支配的に残存する。

もう一つ植民地農業の圧力がある。新大陸の拡大、肥沃な土地で生産される安価な農産物が、どつと流れこんできて国内の農業生産物を圧倒してしまい、農民を苦しめることになる。

これらの要因が重なり合いさらにこの帝国主義段階になつて産業循環の形態が変わり、不況が長びくようになつたこととあいまつて、この段階には慢性的な農業恐慌がつづくわけであるが、この影響はプロレタリア化することもできず土地にしがみつくほかない農民をミゼラブルな状態に追い落すことになつたのであつた。農業問題はこうして発生した。この次は、これをもう少しくわしくみて、それから日本の問題に移ることにしよう。

(SS)

プロレタリアと文化

はみでた部分の記録

――記録映画「人間みな兄弟」――

北島　美恵子

つい最近、闘争中の三池において、第一組合をヒボウする第二組合のビラに次のようなのがあつて問題化した。

「第一組合は一切の批判と発言を押さえ暴圧をもつて引きずつてきたから特殊部落といわれる」「棍棒、竹ヤリ、鉄棒で暴力をふるう三池労組はまさに特殊部落だ」

民衆のなかにいまだに根強く残つている「部落」への差別意識に依拠したデタラメなこの卑劣な攻撃にもみられるように、「部落」差別の意識は顕在的にあるいは潜在的に日本社会のおくふかくに異様なひろがりをもつて泡だつている。

第二組合のこの二重の侮蔑とヒボウにはすぐさま、部落解放同盟を中心とする三千の怒りのデモがぶつけられ、第二組合の組合長菊川は辞任に追いこまれたが、この事件はきわめてアクチユアルに、鋭く突きでた「部落」問題の現在的なかたちをしめしている。

かつて島崎藤村が小説「破戒」でこの「部落」問題を扱つたが、三池の〃ビラ事件〃の直前に記録映画作家亀井文夫が記録映画「人間みな兄弟――部落差別の記録」(白黒・約一時間)を完成した。

スタッフは、かねてから未解放部落の問題に強い関心をよせてきた作家、杉浦民平の原案と多くの人の協力、周到な調査にもとづいて、京都、奈良、大阪、兵庫、和歌山、三重、長野などの、都市、農村、漁村、山村にわたる「部落」を精力的に撮影し、この視覚化しにくい題材をよく記録した。とかく忘れられがちなこの問題が誠実に提記されている。

映画は「月ロケットが飛ぶ宇宙時代の日本に、まだこんなに暗い差別の悲劇、苦しみのどん底にあえいでいる人々がいる」と発想して、表面的な日本の「繁華」な街のすぐ裏側の村――「部落」にメスをいれて、この独占社会の底部をふとくつらぬいている貧困と差別の集中的な表現「部落」のさまざまな実体をえぐりだす。――

街なかのアスファルト道路がきれると急に道がせまくなり、土くれがむきだしたその細い道のさきに――「部落」がある。未解放部落の人々がそこで「一般の人々」からの差別をうけ、普通の人々が思いもおよばぬ仕方で日々の糧をえているのだ。こうしてキヤメラ(菊地周)は、差別の事実と悲劇のかずかずのそのひとつひとつをとらえだすのだ。――「部落民」であるというそれだけの理由で破壊される恋愛、親類からも見捨てられてしまう結婚生活、奪われつづけている生活、泥まみれになつて仂きなお貧困な生活、生活に不向きであるばかりでなく不衛生な環境、こんな環境で仂かされている未就学児童たち、傾きかかつた粗末な家々のなかにあつて異常に豪壮な「部落」の寺、執念のように祈禱する老人たち、そして――こうしたイメージ群に対置して、作者はこうした「差別の悲劇」をうみだす「差別のカベ」をうちくだく闘争の中核としての部落解放同盟、希望としての同和教育の先生たちの努力と、それらの成果をうつしてみせるのである。

なかでも、作者が静かな怒りをさりげなくこめてえがきだした少年たちのシーンはとくに感動がある。

就職試験に不当に落とされた千葉君がドブ川にはいつて、ザルでハンダのクヅをすくいわけてはハンダのノベ棒をつくつて生計をたてているシーン。キヤメラはできあがつたハンダ棒の鈍い光をうつくしくとらえている。千葉君の就職のために足をすりへらしてかけまわり「カベ」にはねかえされて疲れはてている先生と、かたわらで、怒りをおさえて黙々とクツに釘をうつている父親のショット。あるいは、苗代つくりに追われて忙しく、修学旅行に行けないという母子二人暮しの級友をクラス全員が手伝うから一諸に行こうというこの友情の申し出をことわつて、ひとり自力で深夜までクワをふる少年のシーンは、作者の力が、はげしい気魄にみちてすがすがしい印象をみるものにあたえる。

ここには、戦前に名作「小林一茶」をつくり、戦後に「生きていてよかつた」「流血の記録・砂川」「世界は恐怖する」とすぐれた系列をつくりだしてきた作家亀井文夫の独特なヒユーマンな眼、レアリズムの方法をみることができる。

昨年のかれが「ヒロシマの声」「いのちの詩」など充分に力量を発揮しきつていない作品しかつくつていないことを思うとき、この「人間みな兄弟」はかれのよい作品系列の延長に位置づけることができ、この作品をとおしてかれの到達した方法の成果をみることができると同時にその限界を指摘することができる。

かれの記録の方法は、現在多くの記録映画作家を支配している決定台本にもとづいて撮影し作品化してゆくやり方と異つて、作家が対象を充分に調査し研究し内部化して、そしてある予想をもつて対象にぶちあたつてゆき、そこにはみだす生き生きと息づいている現実の新しい相をも見逃さずにとらえこみ、モンタージユによつて主体化するという方法であつて、これはドキユメンタリズムの基本となるべきことだとわたしは考えるが、こうした方法をすぐれて実験する亀井にしてなお対象にかかわるときに、外部的事象をあくまで内部的記録としてとらえかえすのではなく、その直接性によつてとらえてゆく傾斜が濃厚であり、それがアクチユアリテイをよわめているのである。しかも最近の亀井が、とらえたイメージをモンタージユしてあらたな総体的なイメージを構築するとき、ともすると分析的=綜合的視点を欠くヒユーマニズムに流れてゆくため、作品全体としてのトータリーなイメージがこの現実に強烈に対立するものとしてあらわれてこないのである。

だからこの作品「人間みな兄弟」においても、かれはその完成にさいして、――「映画では露わに云つていないが欲を一つ言えば次のことに気付いてほしい」「部落差別をゆるしていることが民衆の力を恐ろしく弱めている。あいつらは部落の者だと云つている本人が、実は他から差別されている身なのだ。こうして幾重にも嚙み合わされ、争わされている。部落の悲劇は河向うにあるのではない。自分自身の対決すべき問題なのである。」

といつても、映画は観客に「差別のカベ」をソトにあるものとして気付かせこそすれ、観客ひとりひとりの内部にある「差別」する醜怪なものに観客をたちむかわせ、さらには醜怪そのもののこの社会の根底的批判にまでむかわせる力は弱い。

映画は、「部落差別」が支配者を存立させ、支配者の策動がさらに「差別」を根深くする、という醜悪な大きなサイクルを云いたかつたのだろうが、作者は「差別の悲劇」への怒りをとおして「差別」の諸現象にしばられてしまい、そこで立止つている。

たしかに、醜悪な大きなサイクルがあることは事実だし、この独占社会にあつてはそのサイクルの中にさらに無数のの小さな醜悪なサイクルがある。「部落」や「一般」の中にもそのサイクルはまわつている。このサイクルをどこでどうたちきるべきなのか?

作家は、やはりみずからをこの現実にうちつけるなかで、そのはみでた部分にこそ鋭意目を注ぐべきなのであろう。はみでたところにみるもの、体感することを内部の記録として表現せべきだ。映像には作家の内部的刻印がおのずとにじみでるのである。

合理化四条件に屈服

全電通続会廿三中委

全労化か総評にふみとどまるかとまでいわれた合理化協力四条件をめぐつて紛糾を続けた全電通は、十七日甲府湯田高校で続会二三中委を開いた。先ず中闘より続会中に会社側と交渉した「第二次合理化計画実施にあたつての基本的了解事項締結に際しての記録書」の内容をめぐつて質疑を行つた。その中には、五ケ年計画擴大修正を遂行するに当つての資本の異常な決意がひめられている。即ち組合側と会社側の見解の相異を認めた上で、「基本的了解事項を締結する前提条件としてこの組合側見解にたたなければならないと解するならば、基本的了解事項など仮調印することはできない」また組合が「不満ながら妥結した」といつているが、「問題は妥結した客観的事実にもとづいて協約額を誠実に履行することである」と極めて高姿勢な立場にたち、生休も「就業が著しく困難な場合」のみとるべきで、「画一的」に何日休むことは「濫用」だといつている。余りにも露骨なため会場全体は重苦しい空気につつまれた。そのため積極的に呑むべきだという発言はなく、せいぜい「組織の実態から止むをえず呑むべきだ」とする意見で、午前中、午後の始めを通じ発言した中央委員の多くは納得できない旨をのべた。最後に近畿代表が、「この協約は双方の合意に達していないから正式調印はできない。全国大会で討議してきめよう」との集約意見をだし、全体に共感を与え、きまるかにみえた。だが、議長である東北の旭中央委員が「この続会中委は前回の中委で態度がきまらず、そのため職場討議にうつし続会中委で必らずきめることを前提に開かれたのだ。再度全国大会までもちこす事はない。ここで結論をだす」といつて強引に採決にもちこんだ。そしてゴウゴウたる非難のなかで予定に従つて採決を行つた。本部民同のしめつけによつて支部委では反対をきめていたのを賛成に廻つたところもかなりあつた。その結果、妥結認める―七九、認めない―三九、保留―一四(過半数は六八)で遂に公社のうちこんだくさりをたちきることなく合理化へ協力する重大な一歩を自らの手でうけ入れた。従つて、その後に討議された賃上げ、処分、昇給延伸、安保闘争についても殆んど闘う姿勢をみせずに終つている。資本の至上命令である合理化四条件への協力は、その後につづく新賃金体系(熟練と職種給の二本建の攻撃)とようしやなく労仂者を合理化運動にくみ入れることになるだろう。

それ故に全電通労仂者は、来る六月廿六～卅日の全国大会(於大津)で必ず四条件を始めとする廿三中委の妥結を破棄し、廿二中委できめた画期的要求を完全獲得にむかつて進まねばならない。その力は充分ある。大会にむかつて分会や支部大会の意向が正しく反映できるような代議員をえらぶことと、運動方針にみあうような指導部をえらぶことが急務である。

攻撃に転ずるチャンス

三池闘争　長期柔軟の破産明らか

再び激突が起つた。十二日会社側は、前日だされた福岡地裁の板べい構築の執行命令にもとづき、早朝より三川鉱ホッパーの周囲に板べいの構築を強行せんとした。即刻、六千名の組合員がピケをはつたが、会社側を擁護した警官隊との衝突で組合員六八名が重軽傷を負つた。ホッパー死守はいまやますます重大な意義をおびるにいたつた。現地指導委員会は「いまこそ長期柔軟の構えから、攻撃に転ずるチャンスである」と確認、三池労仂者の闘うエネルギーを結集していきつつある。だが、原炭労委員長は、「ホッパーというのは戦術的な争奪戦であつて闘争の幕引でもなければ、これがお互いのきめ手ではない。長期柔軟という闘争のなかにおける一つの局部戦線だ」(炭労新聞四八二号)とのべ、長期に三池を包　でいくことの意義を再び強調している。そして、十五・六両日の総評評議員会でもホッパーを〃守している三池闘争を軸に、合理化粉砕をいかにして、全国闘争に波及するのか指導を放棄して、長期に闘うためのカンパに問題をすりかえた。安保闘争が敗北させられようとしている時、いつまでも長期柔軟などといつていたら敗北を合理化するだけだろう。

発行日変更と号外発行

週刊化断行にともない、発行日をつぎの通り変更する

一、次号六月一日付休刊

一、第十六号は六月五日付発行。以後毎週日曜日発行。

なお情勢の進展を適確に報ずるため、廿八日付にて号外を発行するにつき配布体制に万全を期されたい。

戦旗編集局

戦旗経営局

国際問題

フルシチヨフはかわつたのか

決裂した首脳会談

(一)

東西首脳会談が決裂した「U2機事件にたいするアメリカ関係者の処罰を要求しアメリカがソ連領空侵犯飛行を中止しない限り首脳会談の六ケ月ないし八ケ月延期、アイクの訪ソ招請取消し」というフルシチヨフ声明によつて、パリに集つてきた四ケ国首脳は一度の会議すら開くことができずに東西に散つていつた。ソヴエトを中心とする「国際共産主義運動」の指導部が「平和共存の明るい年」を、ブルジョアジーが「繁栄の六十年代」を夫々に謳歌し、その頂点として東西首脳会談を準備し、階級協調の芝居の幕がきつて落されようとしていたのだが、そこえ飛びこんだU2機事件は、芝居の調子をすつかり狂わせてしまつた。首脳会談の決裂は、フルシチヨフ路線が転換したかのようにもみえる。事実、商業新聞の論調は一致してそのように書きたてている。

昨年九月、フルシチヨフ訪米の際、ワシントンに到着した彼は、アイクの歓迎に感謝の意を表しつつ「われわれは、国家代表の相互訪門が有益だといつも考えている。われわれ二つの大国の政治家の会合や話しあいはとくに重要な意義を持つている」とのべ、「私は、大統領が両国関係の改善を心から望んでいることを疑わない」と訪米旅行の最後に再び繰返していた事を想起するならば、パリにおけるフルシチヨフの強硬声明は意表をつくものであつたといえる。変化をもたらす直接的導火線は、いうまでもなく、五月一日、アルメニア地方に侵入し、ソ連領空を侵犯した黒いジエット機U2機の撃墜事件に始まる。五日―七日のソヴエト最高会議におけるフルシチヨフ演説以来、首脳会談を前にしてソヴエト外交は強硬態度をうちだしていつた、U2機のスパイ飛行、それは確かに「キャンプデービットいらい、東西首脳会談の成功を心から待ち望んできた」(アカハタ)という小ブルジョアの期待と幻想をものの見事にうち破るものであつた。そしてU2機事件は、フルシチヨフ路線の破産を明白に証明するものであつたが、しかしフルシチヨフ路線が転換したのでもなければ、まして世界資本主義の新たな局面のもとで、全世界のプロレタリアートにむかつて資本にたいする決起を彼らが呼びかけたものでもなかつた。変化を過大評価することはできない。

(二)

四三年から四五年にかけて開かれたカイロ、テヘラン、ヤルタ、ポツダムなどの一連の首脳会談は、「反フアシヨ戦争」の名のもとに米英ソ三国の同盟を恒久的なものにしたてあげることによつて帝国主義戦争を内乱に転化し、世界革命の突破口をきり開くことを再び挫折せしめた。五五年のジユネーブの雪どけは、「大国間の話しあい」を復活せしめることにより朝鮮、インドシナなどの解放闘争を世界資本主義の心臓部まで波及せしめることを挫折させた。六〇年に再び繰返えされようとしている茶番劇は、階級協調の思想と実践を全世界の隅々にまでゆきわたらせようとしていた。米英ソ三国の恒久的友好関係の樹立は、トルーマン・ドクトリンとマーシヤルプランによつてその夢は破られた。五五年の雪どけは華々しい宣伝の言葉にもかかわらず、なにもきめなかつたし、スエズ出兵や、相つぐ水爆実験の強行によつてその期待を空しいものにさせた。破産しながらも生きながらえる六〇年の平和共存の夢は、黒いジエツト機の焔によつてかき消された。そして雪どけを再現するために、アメリカ帝国主義にたいする愛国的闘争が呼びかけられる。

しかもその反面、失われた夢を再現させるべくフルシチヨフは、十八日二千名を越える各国記者団と会見した際、四五年の立役者ルーズヴエルトをほめたたえ、仏ソ関係の改善をはかつているのテイスト・ドゴールに尊敬の念を捧げることを惜しまなかつた。悪いのは「アメリカの国防総省、軍人のなかのもつとも反動的な勢力」だけなのだと。四五年の時も、五五年の時も、ソヴエト官僚は自国の国境線を維持し、防衛することのみを自己目的化して首脳会談にすべてをかけた。いままたすでに指摘されているように五〇年代末から始まつた世界資本主義内部の矛盾と対立が激化してきている新たな局面のもとで、資本に対する各国プロレタリアートの闘争を世界革命の展望の下に決起させるのではなく、首脳会談と雪どけにすべてをかけさせようとしたが、帝国主義ブルジョアジーの意図と本質はそんなに甘いものではなかつたのである。ワシントンでの微笑も、パリでの強硬態度も、それはすべて一国社会主義論を前提としてのみ導きだされるものであつて、それ以上のものでは決してない。それ故に首脳会談の茶番に惑わされることなく、世界資本主義の矛盾の頂点、日本における安保闘争の勝利をかちとることによつて彼らの夢を恐怖に転化しなければならない、それはこの一週間の闘いがすべてを決する。